

確 信

吾人は、佛教なるが故に信ずるに非ず、基督教なるが故に信ずるに非ず、將又、儒教なるが故に信ずるに非ず。只絶対の眞理なるが故に之を信ずる也。何をか絶対の眞理といふ、曰くいひ難し。暫く語を藉りて、無我の愛と名けんか。夫れ、宇宙の本性は無我の愛也。宇宙を組織せる一切の個體は、其本性に於て、無我愛の活動也。即ち一個體が、自己の運命を、全く、他の愛に任せ、而も、同時に、全力を獻げて、他を愛する、之を無我愛の活動といふ。吾人は久しく、宇宙と自己との本性を覺らず、妄りに、我執と憎惡とを以て自ら煩惱し來りき。而して、今や、則ち、廓然大悟、竟に絶対的平安の境を得たり。茲に翻て思ふ、釋迦、基督、孔子等の諸聖の道、亦實に之に外ならざりしを。

此道は、其廣大なること、其悠久なること、共に、宇宙と同じく、言語の道斷え、思慮の方盡く。自今吾人が執る所の言語動作、幸に、此大眞理の幾分を顯すを得ば、吾人の本懐之に過ぎざる也。

無 我 愛 同 朋

無我愛の眞理

河 上 肇 述

▲僕は『社會主義評論』の擲筆の辭に於て、頻りに『絶対最高の眞理を捉得せり』などといふことを振り廻はしました。今其の縁に因み、茲で簡単に其の眞理の一斑を述べて、本書の附録と致します。

▲絶対最高の眞理などといふ時は、えらい六かしいもの、様に聞こえますが、其の實極めて簡單なものです。人の能く云ふ如く、眞理は大きいものほど簡單です。僕の所謂絶対の眞理は、絶対に簡單なものです。只だ餘りに簡單で、餘りに大きな眞理ですから、人が容易に信じませぬ。昔の先覺が、無暗に『信ぜよ〜』と云はれたのも、無理はなかつた事と思ひます。

▲扱て其の眞理とは如何なる事であるか。曰く、『無我の愛』即ちこれです。

▲玄からは『無我の愛』とは如何なる事である歟。曰く、『自己の運命は全く他の愛に任せ、同時に、全力を獻げて他を愛するの主義』即ちこれです。

▲どうです、如何にも簡単でしょう。豪いものになれとか、金持ちになれとか云はれたとて、それは中々出来ぬ仕事です。玄かし、自分の運命の事は、一切自分の力で計らうなと云ふのですから、如何にも容易な事です。

▲既に自分の運命の事を、一切自分の力で計らはんと云ふ事にすれば、その時に持つて居る自分の力は、(今迄は自分の事にばかり使つて来たのが)全く其の時限り不要になつて仕舞ふ。その不要になつた自分の力の全體を獻げて他を愛せよといふのですから、これ亦た

極めて易々たる事です。

▲云ひ換ゆれば、我利を計る根性と他を惜む根性とを一時に捨て、仕舞へと云ふのですから、決心さへすれば、誰れでも即時に出来る事です。

▲そうして、只だ其れだけの事さへすれば、其の人は即時に、この上ない安心と幸福と自由が得られるのです。

▲それ故一方から云へば、無我愛とは『個人をして、直に、絶對的安心、絶對的幸福、絶對的自由を得せしむるの主義』といへるので

▲どうです、如何にも有り難い話でしょう。世の中の人は、どうかして安心したい、どうかして幸福になりたい、どうかして自由になりたいと思つて、百方手段を求めて苦心して居るのに、只だ『無我愛』を實行することによつて、即時に、此の上のない安心、此の上

のない幸福、此の上のない自由が得られるといふ譯なのです。

▲こんな有り難い教ですから、吾々は一生懸命に之を人に傳へたいと思つて居る次第です。が、中々人が信じて呉れませぬ、本書の讀者も恐らくそうであるでしよう。それ故、今少し説明を加へて置きます。

* * * * *

▲元來この世の中は、そのまゝが極樂であり天國であるのです。それが我利我執に迷ふて居る人には、氣に付かぬ、目に見えぬといふ丈の事です。『無我愛』を實行すれば、地獄が直に極樂になるといふのではない、極樂が地獄と見えて居たのが、今度はほんとうに極樂に見えて來るといふのです。

▲吾々の眼には、どうしても此の世界は其のまゝが極樂です。まあ能く考へて御覽なさい。

▲あなたは今日まで如何して生きて來たのです。生れるのは自分の力で生れたと思ひますか、眼鼻は自分で付けたと思ひますか、地球は自分の力で作り、空氣は自分が製造して呼吸して來たと思ひますか。虚心平氣によく考へて御覽なさい、自然及び社會から限りなき愛を受けて今日に至つたのではありませんか。

▲空氣一つに付いて考へても、吾々は無限の愛を受けて居ることが分ります。空氣が無かつたなら、自分が居ないのみならず、親も居ません、親族も居ません、人類そのものが居ません。只だ空氣一つに付いて考へても、吾々の受けて居る恩は、廣大無邊です。

▲空氣のみならず事々物々皆そうであるに拘らず、あなたは今日まで、人を怨み、自然を怨んで居るではありませんか。それが無明といふものです、迷といふものです。畢竟するに、自分の事ばかり考へて居て、我利我執から離れて居ないのですから、有り難い世界

が有り難いと思へないので、極樂が極樂と見えないので。

▲それ故、地獄に見えて居る此の世界がいやならば、一日も早く我利我執をすてなければ駄目です。

▲我利我執をすてるとは、自分の事は一切構まはん、自然の成行に任すといふ事です。

▲自然の成行に一任するのは危険だといふのですか、馬鹿な事を仰しやい。現にあなたの一身は、今日まで自然の成行に任せて來て居るので。

▲この宇宙自然といふものは、實に廣大無限のもので。人間といふものは、實に蛆蟲にも微菌にも及ばぬもので、顯微鏡にかけても見えぬ位のもので。その蛆蟲先生や微菌先生が自分の力一つで自分の運命が左右できると思つて居るのは大きな誤解で、吾々から見ると實に笑止の至りです。

▲何時大地震があるかも知らぬ、洪水が出るかも知れぬ、火事に遇ひ病氣になり、盗まれたり殺されたりする危険は、時々刻々に迫つて居るのです。まかるに、人間といふ蛆蟲が自力を恃み我利を計つて、ツマラヌ心配に胸をこがして悲んで居るかと思へば、あはれで耐えられませぬ。

▲自分の力では自分の事をどうする事も出来ぬのに、自然の成行には安任せずして、くよくよと思ひ煩つて居ますから、それ故、この極樂世界が地獄に見えるのです。宇宙間に於ける一切の個體は、全力を獻げて此の自分を愛して居て呉れるのに、それに氣が付かぬのです。

▲何にも心配しなかつたのに、自然は吾々を生んで呉れ、今日まで育て、呉れたのが、この有り難き宇宙自然の力ではありませんか。いくら心配したとて、成るやうにししか成らぬのが、この廣大なる宇

宙自然の法則です。自分の事は心配する必要もなければ、心配した
とて甲斐がないのです。それ故、自分の事をくよくくと思ふ我利我
執の念をば、一日も早くお棄てなさいと云ふのです。

* * * * *
▲こんなにも云つても分らぬと仰しやるのですか。それではもう少し考
へて御覧なさい。

▲あなたは父母を有難いとは思はんですか、有難いに相違ありません
まい。何故有難いのです、今日まで育て、呉れたからでしょう。生
れ落ちた時から、別に契約をした事もなく依頼をした事もないのに
父母は一生懸命に育て、呉れたではありませんか。それ故、父母は
有難いのです。既に父母が有り難ければ、いやでも恩を感じるでし
よう。恩を感じるからこそ自分でも父母を憎むことは出来ないでし
よう、愛する心、孝行を怠りたいと云ふ心が起るでしょう。

▲この有難い父母の膝下で、父母に愛せられ、父母を愛してゆく事
が出来れば、その人はどんなに幸福でしょう、平安でありまし
よう。自分の宅へ寝るのが一番楽だと云ふのは、即ち茲の處から出
て来る一般の人情です。實に自然といふものは、こんな有り難い父
母を興へて呉れたものです。

▲玄かし一步進んで更に能く考へて御覧なさい。嘗に父母のみなら
ず、嘗に人類のみならず、宇宙間に於ける一切の個體は、皆父母の
如く、其の全力を獻げて吾々を愛して居て呉れるのです。

▲玄かるに能くこの處を考へて見ないものですか、宇宙の恩が
分らぬのです。恩が分らぬから、愛の心が出ないのです。愛の心な
く、憎みの心を持つて、萬事萬物に對して居ますから、それ故、宇
宙といふ慈母の懷の中に眠つて居ながら、くよくくと無益な心配を
して、地獄に落ちて居るかの様に、泣き哀んで居るのです。

▲恩を感じなければ愛の心は起りません、愛の心なく憎の心を持つて居ては苦しいに相違ありません。それ故に、能く活眼を開いて宇宙の真相を見、あらゆる一切の個體が全力を獻げて自分を愛して居る事を知らなければなりません。それを知るのが悟りと云ふものです。悟つたならば、始めて宇宙の恩が分り、同時に、自分も全力を獻げて宇宙の萬物を愛するといふ心になります。他のものには愛せられ、自分は全力をあげて他を愛する、かういふ世界が、面白い楽しい幸いであるに相違ありません。

▲既に父母の恩を知るならば、決して父母を憎まぬ、父母に對して我利を主張せぬ、それ故一家が楽しく面白く暮らせます。世界もこの通りです。目の前の父母や、手近の所有物にのみ限らず、廣く萬物に對して其の真相を見窮めて御覽なさい。必らず恩が分る、恩が分れば憎まぬ。斯くの如くにして、萬事萬物を憎まず愛してゆくのが、即ち「無我愛」の實行です。

が、即ち「無我愛」の實行です。

* * * * *

▲をかしな人です、何故そんなにふくれた顔をして居るのです。まだ僕の話が分りませんか、それでは一つ承りますが、何が不平でそんなに面白くない顔をして居るのです。

▲成程、貧乏が一番いやぢやと云ふのですか。貧乏にして呉れたといふ恩が分らぬと云ふのですな。

▲よく考へて御覽なさい、それが非常にあなたに對して恩恵になつて居ます。今のあなたには、貧乏が苦しいに相違ありません。まかし其は決してあなたの爲めに悪い事になつては居ません。苦しければこそ、あなたの我利我執の根性が間違つて居ると云ふ事が、氣が付いて來るのです。いくらあせつても思ふ様に金儲けが出来ぬ、自力は恃むに足らぬ、といふ理屈が段々と分つて來るのです。

▲もし苦しみに苦しみぬいて來ると、竟には我利を計るの念が全くとれて仕舞ふかも知れませぬ。そうして、愈々全く我利我執がとれたならば、始めて宇宙の真相が分り、凡ての物が自分を愛して居るとが分り、そこで『無我愛』の真理が悟られ、期せずして絶対の平安幸福を得ることが出来るのです。

▲病氣がいやと云ふのですか、それも同じ事です。親が無慈悲なと云ふのですか、それも同じ事です。良人がつれないと云ふのですか、姑が六かしいと云ふのですか、それも皆な同じ事です。

▲そんな事がつらいのは我利我執のある證據で、その我利我執の根性を根絶させん爲めに、天は斯の如き災難をあなたに與へたので、これは實に有り難いと云はなければなりませぬ。

▲是等の災難といふものは、畢竟あなたを悟りの境遇に導く爲めの手段であつて、やがてはあなたをして絶対の平安幸福を得せしむることになるのです。

▲凡て今まで、あなたが悦れしいと思つた事は、あなたの心の裏にある愛の本性を育てた事になり、つらいと思つた事は、其の愛の本性を覆ふて居た我利我執の雲を拂ひ去る手段になつて居るので、あなたに對しては皆な愛の作用に外ならぬのです。

▲あなたを苦しめた人は、或は憎みの心を以てしたかも知れませぬ。まかしあなたの受けた影響は、皆あなたの爲めに利益になつて居ます。凡て我身に受くる影響は、愛の心を育てるか、我利の迷を醒ますか、どちらかの效能のあるもので、影響を受くる其の人にとつては、悪い事になる氣遣はないのです。

▲かう考へて見ると、どんな事が起らうと、どんな事に我が身がならうと、少しも心配する事はないのです。この世そのまゝが極樂です天國です。

▲「あなたの御話も大分わかりましたが、まだ充分信用が出来ませぬから、先づ私は少しづつ、我執を棄て、見ましよう。」などと云ふのですか、そんな事を云つては駄目です。

▲我執といふものは捨てるか捨てぬか二の處置しかありません。無我といふものに、半分の無我とか四分の一の無我とかいふものは無いのです。そんなに少し宛、我利を棄て、見やうなどと云ふ考では、とても駄目です

▲無我になつてからの幸福平安といふものは、無我になつて見なければ分らんのです。丁度我執根性で人を愛すると思つてする仕事は、自分の指を切つて人にやつたり、腕を切つて人にやつたりするのと同じ事です。我利をすて、他を愛するといふ眞似事をするのは、中々苦しいもので、やれるものではありません。指も切らず、腕も切らず、からだ全體をソツクリ差し出して御覽なさい。よいものを呉

れたと云ふので、人は大事にして可愛がつて呉れます、それこそ爪を切る程の苦しみもありません。

▲「それでは仕方がありません、愈々決心して實行しましょう」と仰しやるのですか、それは何より結構です。吾々は只だの一人でもよいから、この無限の幸福を分かちたいと思ふて居るのです。あなたが愈々實行すると仰しやるのは、何より有難い事です。とにかく御實行なさい、實行さへ爲されれば直きに悦れしくて有難くて仕方がなくなります。

▲「困つた事には實行の方法が見つからぬ」と仰しやるのですか、扱て妙な事を云ひますね。自分の運命は一切構はずに、他人の爲めに全力を盡くすといふのですから、譯ない事ではありませんか。どんな事でもよいのです、力に協つた範囲で、他を愛する事だと思つて居られる事を、只今からすぐに實行さへすればよいのです。

▲あなたは教員でしたか、それなら其の教員を引續きやつて居て善いのです。只今までは、自分の金儲けといふ考を以て教員をして居たでしょう。其の考を今月から抛げ棄て、明日からは一生懸命で只だ生徒の利益になるやうくと其れのみを目的にしておやりなさい。それでよいのです。

▲月給ですか、それは無理に断らんでもよいです。月給としてあなたが貰ふのは、自然の愛の一部分で、空気を貰つて居るのと同じ事ですから、有り難く頂戴するがよいです。自分の方では全力を獻げて他を愛し、自分の事は他の愛に一任せよ、と云ふのは即ちその事です。あなたが一生懸命に教員をやつて居れば、自然は相當と思ふ處まであなたを育て、呉れます。育て、呉れなくなつたら、それで此世を辭したら善いのです。辭すまいと思つても、辭すべき時が來たら、自然は遠慮なく殺して呉れます。それ故、そんな事は一切

心配なくとも善いのです。

▲教員をやめた方がよさそうに思へると仰しやるのですか、それならやめてもよいです。教員をやめる事が無我愛の實行に都合がよいならば即時にやめてお仕舞ひなされ。總體この世の中の職業と云ふものは、皆な「無我愛」を實行する爲めの手段になるのですから、何をしてても善いです、自分の最も長じて居る處に従事すればそれで善いのです。

▲例へば、教員とは如何なるものか、一應其の定義を考へて御覽なさい、誰に尋ねても學生を教育するものとは云ふけれども、金儲をするものとは云はないでしやう。まかるに、あなたは今日まで金儲けの爲めに教員をするといふ心で居つたでしょう、金儲けの手段として教員をやつたでしょう、其の目的、其の我利心が間違ひぢやと云ふのです。若し、他を愛する目的を以て、無我の愛の實行の爲め

其の手段として教員をやるのなら其は結構な事です。そこで始めて、職業の定義に合つた眞の教員が出来るのです。

▲『愈々善く分りましたが、今一つ氣になる事があります、私の父母は私の立身出世を望んで居りますので、將來私が金持になり、父母に安樂を與へることを唯一の樂にして居ます。まかるに今更私が無我愛を實行することになれば、父母がきつと失望致します。これはどうも不孝の様に思へますが、どうしたら善いでしょう』

▲そんな事が心配になりますか、それでは序に説明しましょう。あなたは何時か豪い者になると云つて、今日では姑息な安心を父母に與へて居ますが、それこそ大不孝です。將來竟に豪いものになればと云ふ事が分つた時には、大失望を與へる事になります。又たとひ豪いものになつて、いくらあなたが出世したからとて、それで父母が安心するものではありません。父母を眞に安心さす爲めには、矢張り信仰を得さずの外はありませぬ。それには先づあなたが信仰を得ることが大事です、だから早く『無我愛』を實行なさいと云ふのです。畢竟眞の孝行とは父母を自覺に近かすことより外に途はないのです。

▲吾々が名けて『愛』といふのは、即ち他のものを自覺に近けることを指して云ふのです。故に親に對する眞の愛即ち眞の孝行といふものは、父母を悟りに近けると云ふ事に外ならないので、美しい着物を着せたり、好い食物を食べさせたりするのみが、決して眞の孝行ではありませぬ。

▲自覺するといふことは、人たるもの、眞個唯一の目的です。そして其の目的を達しなければ、ほんとうの平安、幸福といふものは得られぬのです。だから他に對するの愛といへば、そのものを自覺に近けると云ふより外は、決してあり得ないのです。

▲世間で最も誤解の多いのはこの「愛」といふ字の真意です。繰返して云ふが、眞の愛とは、人を悟りに導き、之をして絶対の幸福を得せしむることです。目的は何時もそれです。只だ其の手段は千種萬別でありまして、或は口で説法する人あり、或は筆で眞理を傳ふる人あり、或は商人となるあり、或は教員となるありと云ふ次第です。

▲段々述べて來ました處からして、始めて眞の孝行、眞の職業、眞の愛國、眞の道德、眞の學問、眞の宗教がお分りでしょう。

* * * * *

▲『有難うございました、それで愈々了解致しました。そうですか、それでは、おまけに一つお話を附け加へて置きましょう。』

▲吾々の云ふ『無我愛』は、決して吾々の新に發明したのでは無いと云ふ事です。釋迦、基督、孔子など云ふ聖賢の教は、皆愛に外な

るのです。

▲釋迦が『我欲をすて、大慈悲を行へ』と云はれたのも『無我愛』と同じ事です。基督が『幼児おやなごの如くなりて人を愛せよ』と云はれたのも、畢竟吾々が『自己の運命は他の愛に任せ、自己の全力を獻げて他を愛せよ』と云ふのと同じ事です。又孔子が『己れに克ちて禮にかへれ』とか『天に任して仁を行へ』とか云はれたのも亦同じ事です。

▲佛法で佛の慈悲と云ひ、基督教で神の愛と云ふのも、つまり吾々が『宇宙の本性は無我愛の活動也』と云ふのと同じ事です。宇宙を組織する一切の個體は、皆な全力を獻げて吾々に對し無我愛の活動をして居るのです。或は之を名けて宇宙の愛と云つてもよし、自然の慈悲と云つてもよし、乃至神の愛、佛の慈悲と云つても善いのです。

▲如來々々と善く申しますが、如來とは「斯くの如く來る」と云ふ意味で、自然の成行といふ事です。如來様に一身の運命をお任せするといふのは、自己の運命を自然の成行に任すといふ事で、ツマミ吾々の云ふ『無我愛』の實行に外ならぬのです。

▲もう之れで一應切り上げる事にしましょう。猶ほ不審のある方は、東京巢鴨無我苑へ宛て、質問のかどを詳しく書いてお尋ね下さい。どんな事柄に拘らず、一切の煩悶を解決する方法を、分るまで問答致しますから、御遠慮はいりませぬ。

▲そう、大事の事を今一つ忘れて居ました。と云ふのは、悟後の修養の事です。悟りといふのは、我執の中央政府が倒れた事なので、即ち其時に我執と云ふ迷の國は亡びたと云つてもよい。併しまだ決して油断してはならぬので、地方政府が澤山に残つて居ます。この地方政府は、既に中央政府が倒れた以上、譯なく倒して行ける

のですが、まかし、油断をして居ると時々蜂記して無我の本城に攻め寄す事がある。それ故悟だけ開いて悟後の修養を怠つた時には、決して天下泰平といふ譯にはいかぬ、時々一波瀾が起る、煩悶即ち是れです。固より其の煩悶なるものは、悟前の煩悶とは全然比べものにはならんけれども、苟くも多少の煩悶があるならば、これ即ち地方政府の残存せる證據ゆゑ、日々其の地方政府を倒すことに注意せんといけませぬ。

▲世の中に信仰はあり乍ら、普通の人とそんなに差異のない人があるのは、全く此の地方政府が殘勢を逞くして居るからです。

▲曾參が死ぬる時、弟子を戒めて「戦々競々深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し」と云はれたのは、即ち此の悟後の修養を充分注意せよと云ふ意味です。

▲我執の中央政府が倒れると、兎に角、光景が全變するものですか

3720
3

10639

誰でも、もう之でよいと安心し易いのです。これは極々大事の事ですから、充分に意を用ひて下さい。

雜誌
無我の愛
心靈座談

東京巢鴨村字巢鴨六二五

無我苑

月刊 定價二角
一年分四冊 共八角
發行
巢鴨大日堂
毎日午後
一時

明治三十九年一月廿七日印刷
明治三十九年二月十五日發行
明治三十九年貳月廿三日版

社會主義評論叢附

定價金貳拾五錢

著者

河上

肇

東京府巢鴨村八六番地無我苑第三分苑

發行者

中島益吉

東京市京橋區銀座二丁目一番地

印刷者

中野鏝太郎

東京市京橋區南小田原町二丁目九番地

印刷所

帝國印刷株式會社

東京市京橋區築地三丁目十五番地

不許
複製

發行所

東京銀座

讀賣新聞社

明治七年
創刊
無休刊
（趣味の新開）

讀賣新聞

本紙 定價 一枚壹錢五厘 一月前金卅五錢
三月壹圓 六月壹圓九拾錢 送
料 一月拾五錢 郵券代用 一割増
發行所 東京市京橋區銀座一丁目
電話新橋五郎 三三三五

本社第一大事業 新しき載せ物

ユニヴァーシチ、エキステンション

日進月歩の世運に後れざらしめむとする公開講演會なり此の舉我が邦に於て必ずしも之れ無しとせざと雖惜む可し其の規模小にして未だ功を收むるに到らず是平即ち本社は自ら進んで必らず其の勢を取り講演を公私大學及び高等教育の諸學校教授博士に依頼し既に承諾を得し者數十人あり其第一回を帝國の地に開き漸次羽翼を延して地方重要の地に開演せんとす是は平常獨り政治外交經濟に止らず其力を文學藝術の特別方面に及ぼす我が社の事業として最も適當なる物の一は信譽の何たるを問はず地位の如何を論ぜず苟も世の進歩と文明との後れをさしおとす者には來り聴けはくは裨益する所あるを問はず然りと雖會場の面積及び音聲に限りあれど總ての人の出席は到底これ不可能なり即ち本社はユニヴァーシチエキステンションの如何に速記者を派し講演の速記録を日々紙上に掲載して以て參會の暇と傾となせざりし讀者の爲めにせんとす曾て拍手喝采を以てサイレントフェイス、クボシビリ、タイタ、歡迎する江湖の宿將は又數倍の歡迎を此ユニヴァーシチエキステンションに拂ふべし彼の價値を知る者は又此の價値を識るべし我社は世の進歩に後れずして文明社會の紳士淑女たるに愧ぢざらんことを欲する人々が我社の此の企圖を利用して知識の修養に勉められむ事を切望して止まず

小説誰が罪業

人生の歸趣

如是彼觀

覆面の大家創堂小史が泰西の一名作に據り立案して彩筆を揮へるもの神出鬼沒的事件の變化葛藤は讀者をして應接に遑無からしめ且脚色頗る深刻な極む恐らくは丙午文壇の驕頭たる飾る雄傑なる可し
昨秋より本紙に連載せられたる社會主義評論を以て一世を驚愕せしめ又傾聴せしめたる千山萬水樓主人が更に其筆端を揮うて或は宇宙の本性を指示し或は人生の目的を論定し以て人々を絕對無上の安心幸福を享けしめんとする物讀者よ其の駭古震今の偉論に驚く勿れ、目下連載中
一月四日の紙上よりエケ月間に亘りて連載せらる可き文學士登壇竹風氏の一大長論文にして旋風を捲きたる編纂員の陣中春文壇の寵顧たるべし層々として星や蓋に心酔する者疾く來りて氏が誇々たる萬丈の氣焔に接せむ

女子雜誌

毎月一日發行

定價 一部金拾貳錢 郵稅壹錢
三ヶ月前金拾貳錢 共參拾七錢
六ヶ月前金郵稅共七拾貳錢

▲これ多年意を女子教育と家庭の改善とに用ゐる來りたる讀賣新聞社が、別に獨立の雜誌を發刊し、これに據りて益々平素の主張と抱負とを實行せんとするもの言ふところ珍奇ならずと雖も亦陳腐ならず、中庸を保ち正鵠を得て、穩健なる思想を鼓吹し、豐饒なる趣味を發揮す、其内容の概目左の如し

- ▲講話 (有名の大家に囑して實益あり趣味ある談話を掲載す)
- ▲學術 (通俗科學、通俗法律、通俗衛生等の平易なる談話)
- ▲家庭 (家政、衛生、料理、流行等)
- ▲娛樂 (改良遊戯、茶、生花等の類)
- ▲小説 (女子の讀みものに適せる奇麗なるもの、作者は當代有名の人)
- ▲雜錄、文苑、時報等百花燎亂の觀あり

發行所

東京銀座

讀賣新聞社出版部

（行發日五回一月每）一第本日富豐料材

誌雜業農本日

日本國力大和民族の發展には、國
 民經濟の最大發要素たる農
 業を改善するを以て、殊に首要とす。我社茲
 ると尠からずといへども、日刊の新紙は時に種々の不
 便を感ずることなしとせず、是を以て今又更に日本農
 業雜誌を發刊せんとす。誌中記する所は米、麥、菜、
 果、花卉、畜産、蠶事、林業等より延て農業教育、農
 業政策に及ぶ、而して之が執筆に任ずる者
 は、博士、學士、實際家にして、何れも斯道有數
 の大家なり、加ふる文藝好嗜者にも
 特に一欄を設け、社中の同人亦熱心に從事
 すべければ、日本農業雜誌は深遠適切なる日新
 の學理實際たる趣味ものを合せ供する
 の農業雜誌中に於ける泰斗以て多
 く、私に自ら期す、庶幾くは、當
 業無二の神品たるを得ん。

錢一稅郵錢參拾金部一價定

錢八十七共稅郵金前月々六 錢拾四共稅郵金前月々三

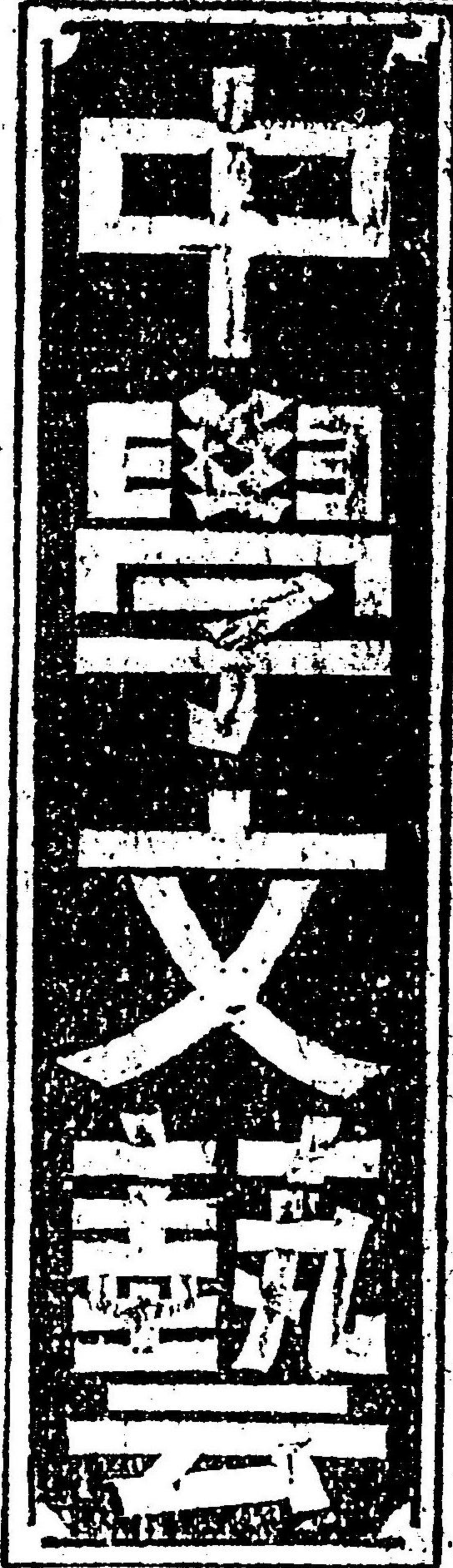
社聞新賣讀 銀座 東京 所行發

集募稿投賞懸

- 論 文(吾人の希望)四十行限
 - 記事 文(寄宿舎の一夜)四十行限
 - スケッチ(村はづれ)廿行限
 - 書簡 文(故郷の母へ)四十行限
 - 新體 詩(梅、殘雪、行軍)廿行限
 - 和 歌(摘草、馬、旗)無制限
 - 俳 句(雛、柳、ペン)無制限
 - 川 柳(土筆繪葉書辨當)無制限
 - 繪 畫(主題隨意寫生)無制限
- 但一行廿一字詰中學文藝係宛詳細は
 日本農業雜誌及びムラサキを觀よ

●懸賞各題一等一圓二等三等は當社出版圖書の内一部●締切二月一日

中學校、高等女學校並びに之と
 同程度の男女學生及び獨學生諸
 君子の思想を高潔にし作文に熟
 達するの道を拓かむが爲めに發
 行するもの文藝上の作品を集め
 添削の上成る可く多く掲載し添
 ふるに文壇名家の文章、繪畫を
 以てす。



發初一三

行號日月

社聞新賣讀 銀座 東京 所行發

農學博士 橫井 虛遊軒文庫 第一篇 農業時論 定價金 八十錢 郵稅金 八錢

農學博士 橫井 氏は學者 同時に經世家 たる人な 其識 見非凡 其議論剴切、且つ眼孔 犀利なる 農商務分立を唱ふる 下の輿論なり

法學士 河上肇 著 虛遊軒文庫 第二篇 尊農論 定價金 七十錢 郵稅金 八錢

農學博士 橫井 氏はを談 想ふに以て 風潮 一回轉を與ふるに 國家の消長 興亡の時に當て其論も適切 覺ゆるを 云讀者必ら痛快を叫ぶ

新川柳抄

東新選 朴念仁 著 近來川柳々々と頻に騷立つれ 意淺くして興乏しく狂句の本體に非ず 意賣の朴子柳風狂句の本體を研め本 穿ちて妙味鮮を多少凡句あるも確に新川

定價金 二十錢 郵稅金 四錢

朴念仁 著 狂歌おれの蜀山人 百年目 伊カラ 鮮北は千島樺太から南は臺灣虎の臥す朝 一度にせよさせたのが此へナブリ

定價金 十八錢 郵稅金 四錢

讀賣新聞社選 第五版 小品集 歸省 定價金 三十錢 郵稅金 四錢

一昨夏本社にて募集せる小品文歸省六千 有餘編中より嚴密なる審査を経て選拔せ しもの五十四編を輯めたり、艶麗なるあ り、清楚なるあり。 所謂 大家の毆り書に多くの趣味を持つ 満々 青年の文を愛する者 は之れを讀め

橘英男

東洋の風雲 漸く動きて 日露 將に干戈を交へんとす 青年士官 某大將の密旨を啣み一身 軍事探偵 壯烈なる事 俠血 湧くが 一美人 物として最も面白き書なり

定價金 四十錢 郵稅金 八錢

上野小 劍氏著 隨筆 その日 定價金 十錢 郵稅金 四錢

著者の友人の家 朗讀會を開いてカル 庭ではこの本の 朗讀會を代用した 昔は叩くと 打出の小槌 がありま した今 讀むほど趣味の出るその日 本が 讀むほど趣味、進歩的思想 あります。 清新その日くはよき本也

小目なし兒

徳田秋 聲氏著 先天的盲目なる一個可憐の少 女を拉し來たり 薔薇の如き其唇を かりて 説來り 説去り 蓬の如くに 亂れたる 家庭の暗面を描き出し て 悲痛を極む

定價金 四十錢 郵稅金 六錢

發行所 東京 銀座 讀賣新聞社

發行所 東京 銀座 讀賣新聞社

池田秋
氏著
好評
再版

萬葉短歌抄

定價金
三十錢
郵税
四錢

萬葉集は國歌の寶典であつて然かも此書は其金玉を拔萃し之に註釋を加へたる者苟も短歌に志ある人は流派の如何に拘はらず常に之を座右に置き朝夕之を熟讀玩味せざる可らず

村瀬義
徳氏畫

青 春

三枚二組
定價十
五錢郵
税二錢

昨年以來讀賣新聞紙上に連載せる風葉氏作小説青春に因みて彩筆を揮へるもの「顯世」「輕装」「雙影」の三枚總て艶麗也彼を讀んで是を

池田秋
氏著
好評
八版

新 家 庭

定價金
卅五錢
郵税
六錢

戰後に於ける國民は如何にして捷の實行を收む可きか云ふ迄もなく家庭改良に待たざる可からず左れば如何にして之を改良す可き此書同問題を解釋するに於て蓋し多少の裨益あるを信ず乞ふ一讀の榮を給へ

梶田半
古氏木
村光太
郎氏畫

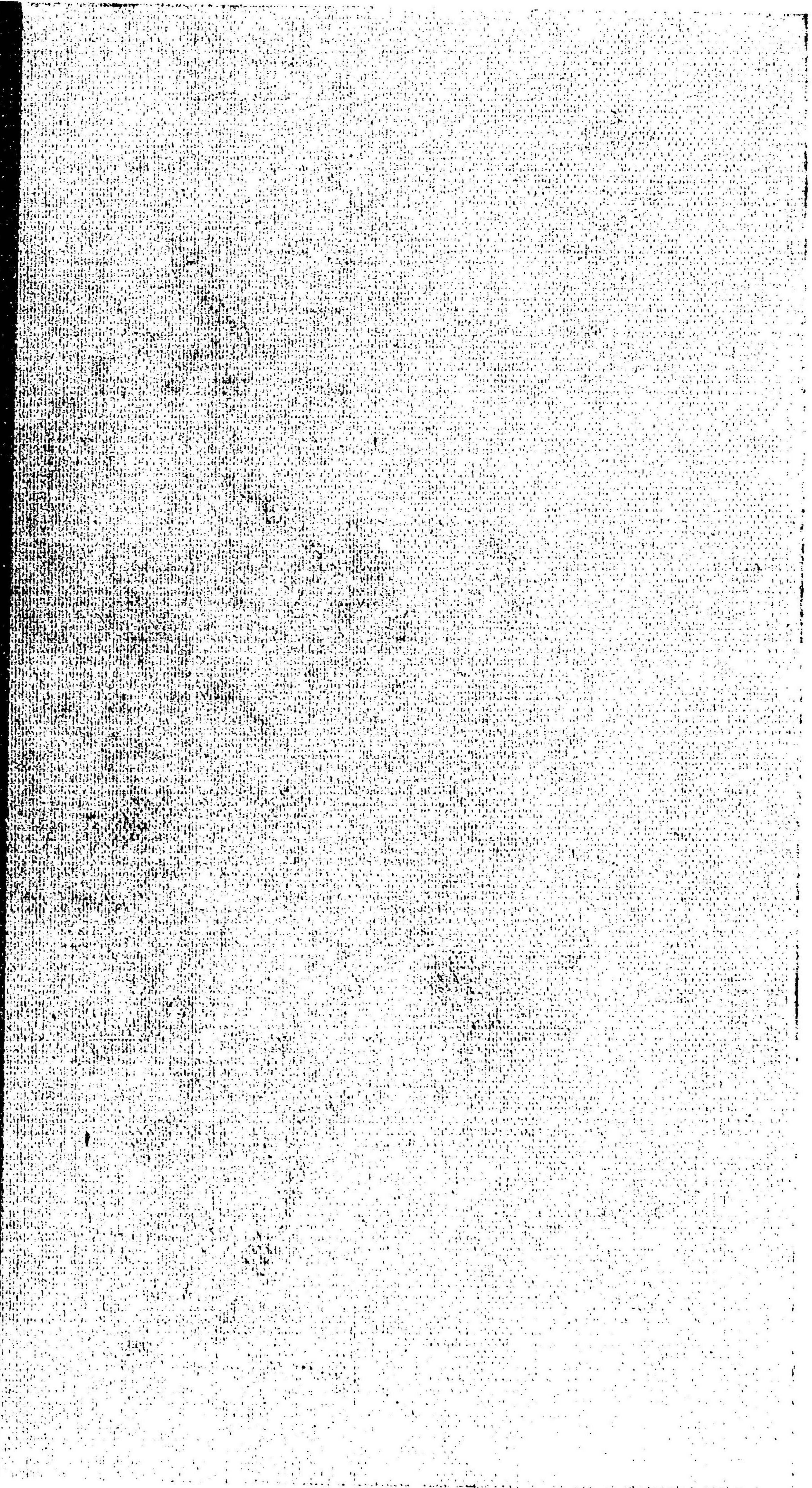
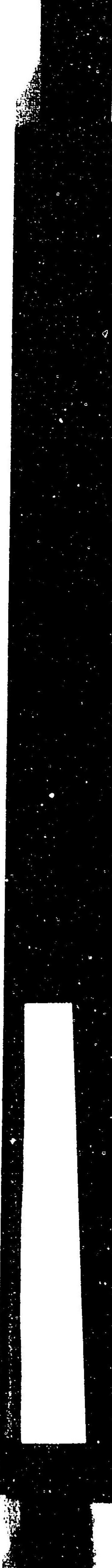
よみ ゑ ハガキ

各六枚一
組大割
引六錢
郵税

第二輯
これ半梶田編輯
の筆致古氏獨特
衫裡自ら楚々の

第三輯
木村畫
芝山内島
百本杭近
難司附谷
大津海

發行所 東京 銀座 讀賣新聞社



特70

395

社会主義評論

国立国会図書館

039579-000-9

特70-395

社会主義評論

河上 肇/著

M39.3

BDA-0150

